

民話

ゆわ座



- 話に遊び 輪を結び 座に集う -

第二回 いまここにも開いている民話の入り口

『サルカニ合戦』をめぐる配付資料

宮城県に伝承された、さまざまな「サルカニ合戦」を
「民話声の図書室(※)」におさめられたアーカイブのなか
からご紹介します。

- ・『がにつこの敵討ち』佐藤とよいさん（山形県西置賜郡小国町）
- ・『雉子と猿』大庄司たか子さん（宮城県巨理郡巨理町）
- ・『蟹のかたき討ち』千葉直次さん（宮城県栗原郡鶯沢町）
- ・『猿っこむかし』今野ふみさん（宮城県加美郡加美町宮崎）
- ・『サルカニ合戦』永浦誠喜さん（宮城県登米郡南方町）

※「民話声の図書室」とは…

「みやぎ民話の会」が四十年にわたって記録してきた、宮城県を中心とする民話語りの映像・音声を、
せんだいメディアアテックと協働し、だれもが活かせる共有財産として、未来へ受け渡していこうとする
活動です。

がにつこの敵討ち^{あだう}

佐藤 とよいさんの語り

(山形県西置賜郡小国町 明治三十五年生)

とんとむがしあつたけどやれ。

むがしある山に、さると¹がに、なんぼかいて暮していたどやれ。

ある晴天の日、がにつこが沢^{さわ}から這^はい出はつたば、だれかそこで昼飯^{ちゆうはん}でも食つたんだか、小^こ昼^{びる}でも食つたんだか、にぎりめし一つひろつたじもの。

「ああ、²いがつた、いがつた。早く³水のあるとき行つて、このにぎりめし食うべ」

つて行つたば、藪原^{やぶはら}から、がさがさとさる出はつてきたじもの。柿^{かき}の種なめめしてなあ。

「なんとなんと、がにつこ、がにつこ。いいものひろつたな。おれも、今日、いいものひろつたわや。柿ひろつて食つてきた。いや、この種植えて、実い⁴なつたば、とつても 食いたでなんねえべや。どうだ、がに、そのにぎりめしと柿の種、とつかえつこしねえか」

そうしつど、がにつこはもともと柿ずきなもんだから、

「⁵あんまりいい。そんならとりかえるかあ。にぎりめしは、いま食えばなくなるし、柿の種植えておけば、あとになつてためになる」

つて、さるのなめた柿の種とにぎりめし、とつかえてしまつたじもの。

そして、畑さ持つていって、柿の種植えだどお。柄杓^{ひしやく}つこに水くんでいって、

はやぐ 生えれ、はやぐ 生えれ

⁶生えねづど ⁷ぼつけえすどー

生えれ 生えれ 生えれ

つて、三日も四日も一週間も水かけにいつたば、ある朝げ、ちよこつと芽え出はつたじもの。こんどあ、また、

1 がに¹かに

2 いがつた²よかつた

3 水のあるとき

4 食いたでなんねえべや

5 あんまりいい
6 ああ、いいよ

7 ぼつけえすど
8 掘りかえすぞ

9 生えねづど

10 生えないのなら

11 ぼつけえすど

12 掘りかえすぞ

はやぐ 8 おがれー、はやぐ おがれ

おがらねづど はさみ切るどー

おがれ おがれ おがれ

つて言つていたば、見でる間におがつて、伸^のびていくじもの。

そうして、二月^{ふたつき}も、四月^{よつき}も五月^{いつつき}もたつたころにはハア、⁹伸びつかれねえほどのながい木になつたじもの。

「いや、これはいい。見こみある」
つて。

はやく なあれ、はやく なあれ

ならねづど、はさみ切るどー

なあれ なれ、なあれ なれ

つて、肥料^{こやし}かけたば、実がなるようになったじもの。

そうしつど、こんどあ、毎日柿の木の下さ行つて、青い柿見で、

はやく ¹⁰えめえー、はやく えめえー

えまねづど、はさみ切るどー

えめえ えめ、えめえ えめ

つて言^いつて、跳^はねたば、ある朝^あげ、まつ赤^かになつて、えんだじもの。

「ああ、これはいがった、これはいがった」

したが、木にのぼられるか、のぼらんねえか、わさわさ、わさわさとのぼつていくども、二尺ものぼるとは、パタンと落ち、また二尺ものぼるとは、パタンと落ちして、その枝^えまでゆきつかれねじもの。せつかくなつた柿、もぎてえども、食^たいてえども、なんとも仕^し様^やねえじもの。

そうしていたどこさ、さるのちきしよう来たどお。

「がにつコ、がにつコ、なにしてた」

「おれな、お前^めとつかえた柿の種^ね植^うえたば、みごとになつたどもがしや、もいで食^たわれねんだ

8 おがれ 〓 育て・成長しろ

9 伸びつかれねえほどの
〓 伸びられるだけ伸びて、
とどかないほどの

10 えめえ 〓 熟せ

よ。のぼるとは落ち、のぼるとは落ちして、とつてもだめなんだあよ」
つて言ったば、

「ああ、そんなこと雑作ざうさくねえ。んで、おれがもいでくれる」

つて、ちよちよことのぼつていつて、赤げなうまい柿、もいでは食い、もいでは食いして、いつまでたつても落としてよこさねじもの。

「さるどの、さるどの。おれにも一つくれ」

つて言うゆと、

「おいっ」

つて、¹¹しつたぎ、ぶつとひっかけて、

「ほら、食え」

つて。

「さるどの、さるどの。しつたぎなどひっかけねえで、うめえの一つ、¹²くへつちや」

つて言うゆと、こんどは一つもいで、鼻汁はなじり、ふんとひっかけて、

「ほら、食え」

言うゆどお。

「さるどの、さるどの。鼻汁ひっかけたのはうまくねえから、うまいのくれ」

つて言うゆと、こんどあ、

「おいおい、あんまりいい」

つて、小便しょうべんたつて、ひっかけてくつだどお。

「なんだつて、さるどの、さるどの。なんぼおれだつて、小便しょうべんひっつけた柿は食いだぐねえ。う

めえのくれ」

つていうと、こんだあ、尻へえ、ぶつとたつて、尻けつの穴けつさき、べつとつけて、

「そら、食え」

つて。がにつこ、あきれはでて、¹³ごつしやいだじもの。

11 しつたぎしつたぎつば

12 くへつちやくへつちやおくれよ

13 ごつしやいだごつしやいだ
|| 腹を立てた

「なんぼ言つても、うめえのくんねえごつたら、おれの木だから、おりてくれ」
そうしつど、

「やがましい、このやろう」

つて、まだ、えまねえ青い柿もいで、がにの甲羅こうらねらつて、ばちつと投げたじもの。がにつこ、
びしゃつとつぶされてしまったとお。そしたば、女おながにであつたもんで、がにの子どもは這いだし
たじもの。子どもがには沢さわき入つて、
「おつ母か、死んだ。おつ母か、死んだ」
つて泣いだどやれ。

そして、いつかさるの 14 ばんばき行つて、あのさる殺してくれつぺと思つて、なんぼかかん
がえたもんだと。

しばらくして、がにつこだち、大きおつくなって、おとなのがにになると、

「さるのばんばき行つてみつぺ」

つて、わさわさ、わさわさで行つたとお。

したば、栗がころころ、ころころところげてきたじもの。

がにつこ がにつこ

15 とき 行くばあー

つったとお。

さるのばんばき

親かたの敵かたとりたくて行くあんだー

「よしよし。おれも助太刀すけだちに行く」

つて、栗、助太刀に出はつたとお。

そして、ずっと行つたば、こんど蜂はちがとんできたじもの。

がにつこ がにつこ

とき 行くばあー

14 ばんば || やかた・家

15 とき || 行く

つて。

さるのばんばさ

親の敵かたぎとりたくて行くあんだー

「よしよし。おれも手つだいにいぐ」

そして、栗と蜂とがにつこで、さるのばんばさむかつていったば、こんど白うすがころんできたじもの。いや、白の下になつてはたいへんだと思つて、みな避けよだどお。したば、白とまつて、

がにつこ がにつこ

どさ 行くばあー

つてきくじもの。

さるのばんばさ

親の敵かたぎとりたくて行くあんだー

つて言いつたど。

「よしよし。いいこときいた。おれも手つだいにいぐ」

つて。

そして行つて、もうさるのばんばさ入るようになったば、大おおこんぶ、ぶはらぶはら、どたら

どたら、来たどお。また、おなじこと言ゆうと、

「おれも手つだいにいぐ」

つて。そうして、栗と蜂と白とこんぶとがにつくと、そろつてさるのばんばさ入つたどやれ。

したば、さるのちきしよう、まだ帰けえつてこねじもの。

「よしよし。みんなで役割してかくれでつぺ。がにつこ、がにつこ、お前はめ水舟みずふねさ入れ。栗は、

17 囲炉裏ゆるりの 18 ほだの中さ、19 くばつてろ。蜂は窓さくつづけ。こんぶは通路さ、20 ぬたばるべし。おれは二階さあがつて待つてる」

つて、白は二階さあがつたもんだじもの。

そうして、さるがもどつてくるの、待つてたどやれ。

くらくなるころになつたば、さる、

16 水舟

|| 水をためておく箱・桶

17 囲炉裏 || いろり

18 ほだ || いろりで焚く木

19 くばつてろ

|| かまえてろ・ひかえてろ

20 ぬたばるべし

|| 長くのびていろ

ああ、寒え、寒え。はやく火いたいてあだるべ。ああ、寒え、寒え」

つて来て、どつきり木くべて、火いたいたじもの。
そうしつど、栗がこのどきだと思つて、ばんつと一発跳ねついて、さるの金玉さくつついた
どお。

「いやあ、あつち、あつち、あつち、あつち、早く水舟さ入んねばなんね」

つて、だつぽーんと水舟さ跳ねこんだば、がにつこ、待つてましたというもんで、両はさみで、
さるの足、ちよん切つたじもの。

「いやあ、痛で、痛で、痛で、血い出る。はやくくもの巢つけねばなんね」

つて、窓さとびあがつと、蜂が待つていて、ところきらわず刺したじもの。

「なんだべ、なんだべ。こんな拍子わるいことあるもんだべか、家にも小屋にもいらんね」
つて、とび出はつたところが、こんぶに足乗せて、すつてーんとひつくら返つたどお。

「こんどきだ」

つて、臼がどかつとさるの上さ落ちて、おさえつけで、さるどこ殺してしまつたじもの。

めでたく、がにつこを助けでくれて、みんなでよろこんで、てんでんの住まいさもどつてい
たど。

とんぴんからりん つつつきさいろ

『山形県飯豊山麓の民話』

―長者原老媪夜話― 小野和子編 より

雉子と猿きじ さる

大庄司たか子さんの語り

(宮城県亘理郡亘理町 大正五年生)

むかしむかしね。

雉子きじが、お正月のお餅、毎年、町のおばさんどこさ持つていったものだから、今年もしよつて出がけだんだとき。

そしたら、途中で猿に行きあつたんだと。

猿が、餅ほしいもんだがら、雉子ばうんといじめで、とつけすべとしたんだげんとも、雉子は、なんぼしても、こいづは離さんねんだとね。こいづ、神さんさ上げてがら、それがらいただくんだがら、なんぼしたつて、猿さやるごどでぎねんだと。

んで、

「堪忍かにしてけろ、堪忍かにしてけろ」

つて、ぎりぎり、ぎりぎり逃げんべとしたんだつて。雉子は飛ばれるす、なんぼ猿、木登り上手だつたつて、雉子を追っかけらんねがつたんだつて。んで、

「こいつ(これで)つてなく、別に今度搗ついてやつから。今日だけ堪忍かにしてけろ」

「ようし、嘘こいだらみろよ。敵取かだきつと」

つて、うんとおつかねぐいじめらつたんだつて。

ほんで、雉子は、今度、なんでかんで餅搗ついで持つてくべなあ、

と思つたげんとも、とつてもおつかなくては、家えさ来てみだもの、

けんけん ほろほろ

けんけん ほろほろ

つて、泣ないたんだつて。ほしたら、表通おもつた卵たまごが、こつ(こつち)つて、なんだがあんまり雉子泣ないでつと思つて、

「なして泣ないでんのだ」

つて、よつてみだんだつて。

「こいうわげで、おばさんの家いさ餅持つていぐどぎ、途中で猿にとつけされつとこ、やつとこすつとこ『神さんさ上げんだがらわがね』つて言つて、勘忍かにしてもらつてきた。まだ搗たいておくからつて約束してきたんだげんと、猿のごつたがら、なぞにすられるんだが、おつかなくて、おつかなくて泣ないたんだつて。ほしたら、ほの、通りかかつた卵たまごがね、

「よし、ほんだらおら達だつ、なんとかみんなたのんできて、助けてけつから心配すんべえすんな」

つて、言つたんだつて。

みんなつて誰だと思つたら、白しろなんだつてね。白と杵きねをたのんできて、水瓶みずがめもたのんでこらつたんだつて。蟹かにもたのんできてたんだつて。あと、それがら昆布こんぶだつて。中ちゆう広い、頑丈がんぢやうな昆布が手伝てづいにきたつてね。それがら、こんどは扉とびらなんだつて。扉とびらつて、昔の大戸おと、一間いけんぐらいある大きな扉とびらね。

それがみんなしてきてね、

「ようし、猿が来たごつたらば、いたずら猿だから、負けでらんね。みんなして力あわせて猿をとつつかめ(とつつかまえて)でけつから」

つて言うんでね。卵は炉端あぐの灰の中さかくれつたんだつて。それながら、水瓶に水いっぱいいためで、蟹と昆布と入つてたんだつて。あど臼と杵は、ほいづで餅を搗いで猿にぶつつけでやるようにね。扉は、やつぱり戸口にいで、猿入つてくる位くれだけ、戸、開けつたんだつて。

ほしたらば夜になつたつけ、猿来たつおんね。ほんでも雉子、おつかねくて、

けんけん ほんほろ

けんけん ほんほろ

つて、泣いっつたんだつて。そうして、猿が、ガタゴト、ガタゴト入つて来て、

「とにかぐ寒いから火焚ひいたいであだつてが」

なんて、炉端に火焚いであだつたんだつて。

ところが、火焚いだんだから、卵が熱くて破裂したんだつて。破裂して黄身と白身が、ドロドロドロツつうの、バチンと跳ねだど思つたら、その猿のおちんちんにくついで、猿は熱いやらなにやらで、今度こんだあ、水瓶に行つて、水に入れつぺえど思つたら、蟹にチョコチョコと、はさまつたんだつて。ほして、熱あついし、

痛いし、外そとに逃げつぺど思つたら、扉はびちんと閉(閉まっているし)まつぺす、

戸のくち開けつぺど思つたつて開がないし、そのうちに、水ひた浸つてだ昆布が、いっぱいに大きおつくなつて、つるつるになつてね、扉の根っこにいるもんだから、つるり、つるりつて、ころんたりばりして歩がんねぐなつたんだつて。

そうしていろいろうちに、臼と杵が、搗いたばりの熱い餅をね、猿めがけで、

「それ、食くいでごつたら食けえ」

つて、ぶつつけたんだつて。そしたら、猿の顔にあだつたんだつて。

「そんでもたんねが」

つて残りの半分をまた、ペタツとぶつつけたら、お尻さあたつたんだと。

ほして、今度は、臼が行つて、ドスンと猿をふんづけでね、

動がんねぐして、

「こら、おまえ、弱いものいじめで、わがんねんだと」

ほしたら、猿、

「これから、ほだことしねがら、勘かに忍にんしてくない、勘かに忍にんしてくない」

つて、あやまつたんだつて。

「んだ。ぜつたいこれがら弱い者いじめするもんでないんだと」

つていうごどにして、はなしてやったげんとも、そのために猿の顔とお尻が赤いんだど。

こんで、おわり。

『宮城県の民話——民話伝承調査報告書——昭和六十三年刊』

編集・みやぎ民話の会 より

蟹かにのかたき討うち

千葉 直次さんの語り

(宮城県栗原市鶯沢 明治四十二年生)

壇山だんやまにすんでた猿さるつこがね、里のほうさ出てきた。ほつかぶりをして、抜き袖ぬそでにして、ひょうひょうと口笛をふいて、なにかいいことがねえかなって出てきたわけです。

お庄屋しやうやのところまで来ると、その前に清水のわく池があった。夏のはじまりでずいぶんあついから、蟹が洗い場のところさ出てきて、夕すずみをしていた。

「おう、おう、おう、猿さるこ衆しゆうかや」

「おう、蟹かにこ衆しゆうかや。なにしてたつけ」

「あんまりあついから、すずんでたとこや」

「おう、そうか。ところで、なにかいいことねえかや」

「あるある。あのな、お庄屋でな、今日嫁とりでご祝儀だとや。そんで餅つくんだと」

「はあ、そいつ食いてなや」

と、こうなったのさ。

「んだら、おれの語るとおりにやれ。蟹かにこ衆しゆうや、おめな、大きな石いしこたがいてきて、後のうつしよつるべきドボンとぶちこめや。

そしてエーエーエンエンで泣くまねしろ」

「そうすればいいのがや」

「そうすれば餅ついてた人ら、童わらしがつるべき入へえったつてんで、みな出てく。おれ、その間に白うすごところばして餅もつてくから」

「ああ、いい、いい。んだけど猿さるこ衆しゆうや、そいつ一人して食つてわがんねぞ」

「食かねつちやや。二人して食うのよ、山さもつてつて」

「んで、おれ、あどがら行けばいいんだな」

こういう約束で、ご祝儀もだいぶすぎて餅つきになった。

このへんではね、餅つきをするというと餅つき歌うたうもんだから、すぐわかるんですよ。

そろたそろたよ

もちつきやそろた

チヨイチヨイ

馬屋まやの石のそばそば行いって見てたら、はじまったから、

「蟹かにこ衆しゆう、いまだぞ」

つてんで、蟹かにこ、じき裏のうらつるべき行いって、わきにあつた大きな石、ドボンでぶちこんだわけだ。そしてエーエーエンで、大きな声で泣くまねしてた。いっしょけんめ餅つきしてた人だち、

「そら、童井戸わらしいどさ入へえった」

つて、そいづおいて、みんなわらわら出てつたっちゃ。

そのすきに猿こ衆、白ごろりころがして、すこし坂んなつてつ所、ゴロゴロゴロゴロずうつところがしてつたの。

蟹こ衆は、猿こ衆にみな食れてはわがんねと思つたから、あどがらおつかけてつたわけだ。ワツサワツサ、ワツサワツサ、川ん所行つたれば、街道つ端に餅べつたり落つてたんだつてね。

「なんだこれ。おれのぶん、ここさおいてつたんだな。野郎あつちや行つていい所食つてたべけど、よしよし、ここでいだけばいいんだから」
つて、はさみではさんで食べてた。

ところが猿こ衆、ゴロゴロゴロゴロいっしょけんめ白おして、山さ行つてまがつて見たところ、餅さつぱねえわけだ。

「さあ、たいへんだ。どごさ行つたべな」

つて、こんどは汗かきかき走つて尋ねてきた。とちゆうまで来たたら、蟹こがはさみではさんで食つてる。

「やあやあやあ、蟹こ衆や。おれ、さつぱとそれ落とちちまつて、なんにもねがつたおんや。おれさも食せろや」「なにや。あつちで土のつかねえいい所ぜんぶ食つてしまつて、もつと食せろつてごど、ねかんべつちや」

「いやいや、そうでねえの。落としてしまつて、あつちや行つ

てみたらば、さつぱねがつたの。んだがら、すこし食せろつちやや」

「やんだ、だまされね。おめ、いつつもいいごどばり語んだがら」

「そんでねえの。ほんとにねがつた」
しゃべりながら、蟹こ衆、はさみではさんではバツチリバツチリ食つてた。

「なんだ、この蟹。食せねつて。んだばこの石、たんがいてぶつけつと」

蟹こ、すつかりおびえてしまつて、
「ああ、食せる食せる食せる。食せつから、待て。まず待て」
こうなつたわけだ。蟹こ、こつちのほうの土のついてつ所はさみで切つて、

「ほれ」

「なにだつけやあ、土のねえ所や」

「こいつてねがつたら、やんだ、おら」

「よーし、ほんとうにこの石ぶつけんぞ」

「ああ、食せる食せる食せる食せる」

蟹こ、こんだ餅のはじっこぜんぶよけて、つきたてのまん中の一番あつち所、そいづ両方のはさみでバツチリはさんですくつと、猿この面さぶつつけてしまつた。べつたりひつついたね。

「あつ、あつ、あつ、あつ」

つて、その池さ行って、へがしてあらったんだね。それから猿この顔は赤くなつた。

さあ、猿こ、怒つたよ。

「この、くそ蟹！」

つてんで、石たがいて、ズボンとぶつつけた。蟹こはつぶれて死んでしまった。

ところがつぶれた蟹この腹から、小さい蟹こが二匹トトロトロトロ出てきて、池ん中さ入つてつた。

なん年もなん年もたつた。その蟹こらも一人前なつて、誰がらつてこともねく、親が壇山の猿に殺されたつてことを聞いたわけだ。それで、いつかかたき討ちすつぺと思つて、その機会をねらつてた。

ある日とうとう、その猿こが出てきた。ああ、あの猿だなつて思つたけど、兄さん蟹こが病氣だつた。

「とても、おれは行かれねえから、きさま行って、かたき討ちしろや」

「よし、おれ一人で行ぐ」

つて、弟、むこうはちまきして出はつてつた。

洗い場ん所の台さ上がつて、はてどうすんべと考えてたら、縫い針がむこうのほうからツツクモック、ツツクモック歩いてきた。

「おや、蟹こ衆や、むこうはちまきしてどごさ行く」

「ああ、いい所さ来た。実はこういうわけでおれの親父が壇山の猿に殺されてしまった。兄きは病氣だから、おれ一人でもかたき討ちすつぺと思つて、出はつてきた所や」

「そうかや。ケチな野郎だ。よーし、おれも行って助太刀する」つて言つてる所さ、栗がコロコロこつてころがつてきた。

蟹この話聞いて、栗も助太刀することになった。針こはツツクモック、ツツクモック、栗はコロコロコロ、蟹こはワツサワツサ、ワツサワツサ行つたわけだ。

むこうから、なんだか地ひびきするような氣した。なんだべなつて言つてた所に、ひげ八の字に立てて、まなこギラギラさせて、大きな白がゴロゴロゴロゴロ来た。そうしてやつぱり、蟹この助太刀さ行くことになった。

四人して歩いていったら、道ばたに牛の糞べつたり落つてた。

「おう、おう、おう、おう、お前だち四人そろつて、どごさ行くのや」

「おう、お前も来いや。かたき討ちさ行くんだ」

「そうか、あの野郎、ひどいやつだ。んで、おれも行く。おれ、なにか、やつことあつぺか」

「ああ、なにかあつぺや」
つて、牛の糞も行つたんだね。

針はツクモック、ツクモック

栗はコロコロ、コロコロ

蟹はワッサワッサ、ワッサワッサ

白はゴロゴロ、ゴロゴロ

牛の糞はベッタクッタ、ベッタクッタ

と行ったわけだ。

そうして猿この家うちさついた。行つてみれば戸しまつて、だれもいねの。

「よし、んでは持ち前持ち前さついて、猿この来んの待つてつぺしや」

こういうことになった。

「んで針つこ、お前は寝床ねどこん中さ入れ。ごぎの下さ入へえつて、寝たらばつつくんだぞ」

「よし、わがつた。おれはごぎの下だな」

「んでは栗つこ」

「ん、おれは」

「お前は飛ぶのうまいがら、囲炉裏いろりの灰あくん中さ入へえれ」

栗が灰あくん中さ入へえつた。蟹あひこは水瓶みずがめさ入へえつた。白は戸うすの口の上さあがつた。ところが牛べこの糞くそさつぱり持ち前ねえの。

「なんだ、おれ。なにすればいいのや」

「こまつたなや。んだ、お前め戸の口のまつ正面さいろ。猿こ逃げつとき、足はらえ」

さあ、それで、いまかいまかと待ちかまえてたわけだ。

あいかわらずののんき野郎の猿こ衆、鼻の所さほつかぶりして、抜き袖そでんなつて、ひょうひょうと口笛をふきながら帰つてきたんだな。夜遊びに行つて。

「うーう、さむ、さむ、さむい」

そうして戸をあけて、がらり入つてきた。さむいから、さつそく床さ入へつて寝たわけだ。そうしたら下にいた針こが、このへんをツクツクツクツクつついたわけだ。こんだあつちのほう、ツクツクツクつて。

「なんだ、これ」

つて、猿こ、一人ごと言いながら別のほうむいた。またツクツクツクつてつついた。

「なんだ、蚤のみいたな。たまんね」

猿こおきて、やつたんだ。むかし蚤のみいたときね、きてるものを火さあぶつたの。そうすると、蚤のみ、逃げるんです。それをやつた。火をたかなくてねえから、火ふき竹もつてプーツプーツと。

さあ、中さ栗入つてたもの。やりきりドーンとはね出て、このまえ餅でやけた面つらさベツタリとくつついたわけだ。

「あつ、あつ、あつ、あつ」

つて、水瓶みずがめさ行つて顔つっこんだ。蟹かにこ、親父おやじ殺したのこの猿さるだなつて、はさみでバッチリ鼻はなばはさんだ。

「あいた、いた、いた、いた」

逃げつぺど思つて戸かどの口くち来たら、牛うしの糞くそこのときだと足あしひつぽつた。ずでんところどしんだ所ところさ、むこうはちまきでにらんらんでた白しろが、上にいたもの。ドスンとやつてしまった。

こういうふうにして、めでたくかたき討ちをやつたの。

『宮城県の民話——民話伝承調査報告書——昭和六十三年刊』

編集・みやぎ民話の会 より

猿さるつこむかし

今野 ふみさんの語り

(宮城県加美郡加美町宮崎 明治四十一年生)

むがすあつたづおんな。

雀すずめつこのどきさ、猿さるが卵たまごもらいに來て、

「雀すずめどの、雀すずめどの。卵たまごけろ」

と言つたんだと。

「けらんねえ」

「けねごつたら、この家こゑぶつ壊こわすど」

と猿さるが言うんだと。雀すずめつこ、

チュンチュン

とないて、卵たまご (くれてやったら) けだれば、猿さるは、

一いちの坂さかで

二にの坂さかでも ころころ

三さんの坂さかで

(こわして) とぶつちやいでしまったと。そして、

「また、けろ。また、けろ」

と言うんだと。

雀すずめつこ、また、チュン、チュンとないて、二つ目の卵たまご、けだれば、

一いちの坂さかで ころころ

二にの坂さかでも ころころ

三さんの坂さかで べつちやり

と、まだもぶつちやいでしまったと。そして、

「また、けろ。また、けろ」

と言つて、三つ目もぶつちやいて、とうとう雀すずめつこの生なした卵たまごみなもつていつてぶつちやいてしまったと。

雀すずめつこ、チュン、チュン、チュンつてないでだれば、栗くりつこやつてきてね、

「雀すずめどの、雀すずめどの、なしてないでだ」

つてきいたと。

「せつかく卵たまご生なしたのに、猿さるつこに(すっかり)みながらとられてしまった」

つて雀すずめつこ言かつたれば、栗くりつこ、

「よしきた。敵かたきとつてやる」

つて言かつたんだと。

つぎに、罾たみはり針はりやつてきて、

「雀すずめどの、雀すずめどの、なしてないでた」

「せつかく生なした卵たまご、猿さるつこにみながらとられてしまった」

「よしきた。敵かたきとつてやる」

つてね。その後のちに、蟹かにだの白しろだのびた糞くそだのもやつてきて、

「よしきた。敵かたきとつてやる」

つて言うので、みんなで猿さるつこの家いへさ行いつて待つてたんだと。

しばらくすつと、猿さるつこが、

「おお、寒い、寒い」

つて、杉すぎ葉はつこたが(かっいで)つて帰かえつてきたんだと。

栗くりは、すでに炉いろの中なかさくぐつていたもんだから、火かたいた時とき、

猿さるの金きん玉たまめがけてドンとはねた。

「あつつい、あつつい、あつつい」

つて、水みづ瓶びんさ行いつて、金きん玉たま冷ひややすべつて思おもつたれば、水みづ瓶びんの中なか

にいた蟹かにつこに手てはさまれたと。

「いた、た、た、た。こんな時、寝た方がいい」
つて寝たれば、今度は、寝床に畳針がいて、
チクチクチクチクつてきました。

「いたい、いたい」

つて、外さどび出したれば、びた糞くそで（つんのめって）つんなめつて、すてんと
ころんだ。そこへ、桁けたの上けにいた臼けが落ちてきて、猿さるつこは退
治しされたんだと。

こんで、どびんこさげて、おちやつこのまんね。

『宮城県の民話——民話伝承調査報告書——昭和六十三年刊』

編集・みやぎ民話の会 より

サルカニ合戦

永浦 誠喜さんの語り

(宮城県登米郡南方町 明治四十二年年生)

むがし。

あるとき、カニがおにぎり見つけて食いようとしてたどごさ、サルが柿かじりながら通りかかったど。

そして、柿食ってしまったから、

「カニ殿、カニ殿や。おれ、柿の種持つてる。おにぎりを取っ替えねえが」

って言ったど。したら、

「いま食うべとしてたどごだ。種っこ、もらったつてうまぐねえ。おら、いいから、おにぎり食うから」

って、カニ、言ったど。

「そんなこと語んねえでやあ。この柿、大きくなつて生ると、うんとうめえ柿だから。おにぎりなら一つだけつつも、毎年、うめえ柿¹なんぼも食うにいい。柿の種と取っ替えろ」

「んたら、取っ替えでみつかなあ」

って、おにぎり^と柿の種、取っ替えで、そして、サルはおにぎり^をむちやむちやと食ってしまったど。

カニはあとをたのしみに、柿の種持つて家^えき帰^{けえ}つて、庭さ植えたんだと。

そして、土が乾くと水かけながら、

早く芽を出せ

出さねえごつたら

ちよん切るぞ

って言ったんだと。

して、芽を出したれば、今^{こんだ}度あ、

早く^{おっ}大きくなれ

大き^{おっ}くなんねえごつたら

ちよん切るぞ

って、水かけたんだと。

して、ずんずん大き^{おっ}くなって、

早く実^なが生れ

生^ならねえごつたら

ちよん切るぞ

って言ったたら、柿、生^なつたど。

でえ、てつぺんの方は赤くなつてるが、下の方はまだ青いんで、眺めていたつけが、どのみちカニは木さ登ること出来^でなかつたど。

そごさサルつこ来て、

「カニ殿、カニ殿。なにしてだ」
って。

「柿赤くなつたげんつも、なかなか登れそうもねえから、眺めてやごごだ」

って言ったんだと。

「んだら、おれ、木登り上手だから登つから。登つてやあ、柿もいで、そして、下き落としてよこすから」

「ああ、おれ登らんねえから、ほだらば、サル殿、たのむ」
つうことになつて、サル、わらわらと木き登つていったと。

そして、まず木の上の方のまつ赤なやつ取つて、

「ああ、うめえ、うめえ。赤くなつてつぞ、これ」

つて、むちやむちや食つてんだと。

「なんだつけや、お前めえばかり食つてえ。おれにもよこしてけろ」

つて、カニ、下から叫さかんだれば、

「いま、²やつと。ほれっ」

つて、まだ青い柿もいで、カニさぶつけんだと。

「サル殿、サル殿。少し静かによこしてけろ」

つて語つても、

「も一つやつから、ほれっ」

つて、サル、ぶつけてよこすんで、とうとうカニの甲羅こうらぶつ割つあけで

しまつて、死んでしまつたど。

でえ、子ガニ泣いでいたど。

そごさ一番先に来たのは卵でね、

「なして泣いでだや」

つて聞いたれば、

「お母がさん、サルに柿ぶつけられで殺されでしまつたんで、泣いでんでがす」

つて言つたど。

「とんでもねえことになつたなあ。んだらば、敵取りかだきすんべしや。お手伝いすつから」

そうしてたどごろき、ウシのべた糞くそが来て、そのこと話したら、
「良いがべ、おれもお手伝いする」

つうことになつた。

それから次に、ごろごろ転んで、白も来たど。

「ほんでえ、おれも応援すつから、敵取りかだきやれ」

つうことになつて、みんなそろつてサルの家き行つたれば、

丁度、いなかつたんだと。

そんで、いいでも火い焚く囲炉裏いろりの中き、卵へえが入つたど。

カニは水瓶みずがめさ入つたど。あと、入り口のどごさは、べた糞座つて、白は屋根さ上がつていたど。

そういう段取りして、配置きついていたれば、

「ああ、寒え、寒え」

つて、外からサル帰つてきて、火い起こしてどんどん焚いて
やっただ。

「ああ、ほどつてきた。気持ちいい、気持ちいい」

つて、手え出して当だつていたどごき、卵、ぱちーつとはじ
けて、火のついた灰といっしょに、サルの腹から股の下まで、
ぶっ飛んだと。

「あつ、熱つ、熱つ」

と、水瓶さ行つて、手え突つ込んで水かけべとしたら、カニ、
鉄はさみでその手いでば挟んだど。

「あつ、痛え、痛え」

つて、外さ飛び出したら、入り口にいたべた糞くそ、足さくつつかつ
て、滑つて転んだどごき、臼が屋根から落ちてきて、サルどご
べつちよりつぶしてしまつたど。

んでえ、とうとうサルは敵取かたきられて、殺されたつけどしや。
んだから悪いわりことはするもんでねえんだとしや。

こんで えんつこもんつこ さけたどしや

註1 なんぼも食うにいいいくらでも食べることができてる

註2 やつとやるぞ

『登米郡南方町の民話—青島屋敷老翁夜話下巻』
あおしまやしきろうおつやわ

(みやぎ民話の会叢書 第十集 みやぎ民話の会編)より

主催：みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム・せんだいメディアテーク
助成：財団法人 地域創造

<http://table.smt.jp/>

「考えるテーブル」で行われるさまざまなイベントのスケジュールや
これまで開催されたイベントのレポートを閲覧できます。

